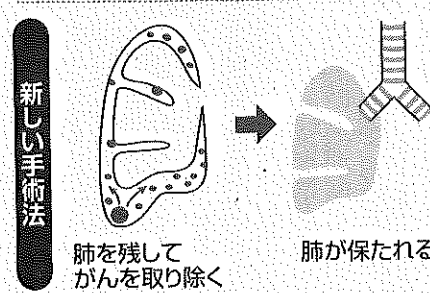
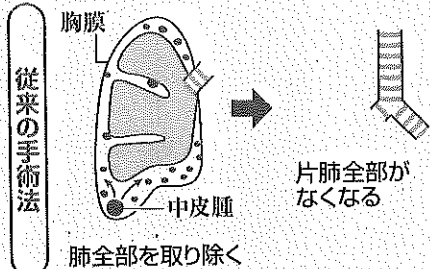


胸膜中皮腫手術 肺摘出せず温存

産業医大が新治療法



産業医科大病院(北九州市八幡西区)は、断熱材などに使われていたアスベスト(石綿)が原因で発症する胸膜中皮腫の治療法として、肺を摘出せずに温存できる新たな手術法を開発したと発表した。片方の肺を全摘する方法より患者の負担が少なく、職場復帰も容易になるといふ。(牟田口洗介)

胸膜中皮腫は、肺の外側を覆う胸膜にできるがん。厚生労働省によると、石綿が全面禁止となった2006年から19年までに、中皮腫によって全国で毎年1000人以上が死亡している。手術は、片方の肺を胸膜ごと切除する方法が一般的だが、肺が一つになると呼吸機能が低下し、日常生活に支障が出る。負担が大きく、高齢者は手術を受けられない場合が多いという。

新しい手術法は、がんが広がる胸膜だけを全てはがし取る。膜は非常に薄いため、担当する医師には高い技術が求められるが、肺の入り口の肺門から膜をめくるように取り除くことで、肺を残してがんだけを摘出することが可能になった。

同病院では2012年、職場復帰が難しいとして手術を諦めていた患者のため、胸膜だけを一部切り取る手術を実施。その経験から、がんを残さずに摘出するため、胸膜を全てはがし取る手術法の開発に着手した。16〜20年に36人(40〜70歳代)の患者にこの方法で手術を実施。肺にまでがんが広がっていた人などを除き、31人が膜ごとがんを摘出。術後3か月で職場復帰できた患者もいたという。

結果は5月に日本呼吸器外科学会で発表された。同大病院長で呼吸器・胸部外科教授の田中文啓医師は「肺を残すことで、術後の生活の質が保たれ、就労も可能となる。これまで手術を諦めていた人にも有効な手術法だ」と話している。

(掲載について読売新聞社許諾済、無断転載(コピー、スマートフォン等での撮影)禁止)